Osaka University Knowledge Archive

Title	中国帰国者三世・四世の教育問題 : 日本生まれの子どもたちの学校エスノグラフィ
Author(s)	高橋, 朋子
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49217
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【1】

氏　　名	高　橋　朋　子（たかはし　ともこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２１５０４　号
学 位 授 与 年 月 日	平成 19 年 6 月 28 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学　位　論　文　名	**中国帰国者三世・四世の教育問題－日本生まれの子どもたちの学校エスノグラフィー**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　成田　　一 （副査） 教　授　三牧　陽子　　准教授　三藤　　博

論 文 内 容 の 要 旨

本論は、日本生まれで日常の日本語会話に困らない中国帰国者三世、四世の子どもたちに焦点をあて、彼らが抱える教育問題の現状やその要因を学校生活、家庭生活の相互作用の中から明らかにし、支援を提言することを目的としている。その背景には、既に日本への帰国を果たし、日本に生活の根をおろした帰国者たちの三世、四世の子どもたちが日本生まれとなっている現状がある。

この日本生まれ児童の出現は日本の学校社会に新たな問題を呼ぶこととなった。彼らは、日本文化や習慣などに接触しながら成長し、日常の日本語会話にあまり問題がないにもかかわらず、「勉強についてこられない」という現場からの報告が多い。それはなぜなのだろうか。それは、一時的にせよ、ダブルリミテッド－２言語環境にある子どもたちがどちらの言語も生活年齢相当に発達していない状態－に陥っているためである。彼らは、「ぺらぺらしゃべれるのにおかしい」と言われながら、学校では学力不振や友人関係の構築に困難を感じ、家庭では親子の間に共通の言語が存在せず、コミュニケーションが量、質ともに希薄になってきているという二重の悩みを抱え、苦しんでいる。これまで学校が受け入れてきた学齢途中での編入児童が抱えてきた言語や習慣の壁、アイデンティティの揺らぎなどとは全く異なる新たな問題が生まれているのである。

本研究は、実際の小学校をフィールドとし、観察データやインタビューなどをもとにエスノグラフィーを書き、客観的な言語テストの結果も含めて考察を行った。考察においては、子どもたちの言葉や行動を文脈に依拠したものとして意味づけを行った。その結果、彼らや親世代、祖父母世代が抱えてきた就労や経済的条件、言語や文化の差異、生活や適応への困難などが子どもたちに再生産されていることが明らかになった。つまり形を変えながら、一層深刻化し、顕在化しているのである。

彼らの背景を理解することなくして現在の子どもたちが抱える問題を考察することは不可能であるという観点から、中国帰国者を取り巻く歴史的背景と現在の状況及び彼らが存在する背景について整理した。なぜなら、中国でどのような人生を過ごしたかという経験が、祖父母や親世代の家庭観、教育観、人生観を形成し、それらはすべて生活環境の中で獲得された認識・行動様式（「ハビトゥス」）として現在就学中の子どもたちに継承され、その成長や発達に大きな影響を与えているからである。

ニューカマーの児童生徒の学校生活に関する先行研究では、受け入れ過程や適応、日本語教育や母語教育、学校文

化やアイデンティティなどの視点から、知見が積み上げられてきた。しかし、これらの対象は学齢途中の編入児童であり、本論で取り上げた日本生まれ児童に関する研究は管見の限り非常に少ない。考察に当たっては、文化資本とハビトゥス（ブルデュー1991）、資源（ウォルマン 1991）、言語相互依存モデル（Cummins1984）を用いた。文化資本とは子どもたちが利用できる資源の総体を指し、資源とは、親がうまく生活していくために活用するリソースを言う。本論ではウォルマンを援用し新たな資源の枠組みを用いた。言語相互依存モデルは、２言語には共有する深層部分があり、L1 が成熟すればその能力は L2 に転移されるというものである。本論の対象児童は L1 が発達していないため、L2 の獲得にも困難を抱えている。

まず、子どもたちの２言語能力について客観的なテストを用いて評価をおこなった。テスト結果からは静的な一側面ではあるが、彼らが２言語ともに年齢相当に発達していないダブルリミテッド状態にあること、学力不振の状態に陥っている児童もいれば、好成績を修めている児童もいることなどが明らかになった。日本生まれであっても中国語能力の高いものは概して日本語能力も高く、中国語能力が年齢相応に発達していないものはやはり日本語能力も年齢相応の力に達していなかった。これらは言語相互依存モデルによって説明がつく。またこの傾向は低学年ほど顕著に見られた。高学年になると獲得的資本や友人関係の構築、認知力の発達などに助けられ、中国語能力は高くはないが日本語能力は相応に獲得している児童が見られた。次にこのような言語状態が、実際の生活世界の文脈の中でどのように現れているのかを見るために、彼らの学校および家庭での言語活動を考察することにした。

エスノグラフィーによるフィールドノーツ形式を中心に子どもたちの日常を描くことを試みた。また観察者としての筆者の関わりも前面に出している。それは「フィールドに関わる観察者としての自分」を認め、どう関わったか、どう感じたかを盛り込んだエスノグラフィーを目的としていることによる。学校と言う場で、子どもたちが教師や友人とどのような相互作用を行っているのか、どのような言語能力が要求されているのか、ダブルリミテッドであるということは学校という場においてはどのように現れているのかを在籍学級や日本語教室などのデータから考察した。子どもたちの多くが、その成績や学校生活において周辺化している様子が浮き彫りになった。さらに、日本語教室及び中国語教室のあり方やその意義についても論議した。日本語教室は日本生まれの児童にとっては幼少期に獲得できなかった BICS や弁別能力を再体現、再獲得する場であり、それらを目的としたカリキュラムが構成されていること、中国語教室はもはや母語教育ではなく継承語教育としての役割を果たしていることが明らかになったと同時に、学校内で両教室の存在が周辺化していることも浮き彫りとなった。さらに、文部科学省の全国一斉学力テストの結果から子どもたちの現在の学力を比較したところ、成績にばらつきが見られたため、その要因を考察した。好成績の児童を支えているのは、家族のサポート以外に読書や両言語能力の発達という要因が挙げられた。

さらに、子どもたちの家庭での言語をめぐる状況について考察を行った。子どもたちの多くは家庭でも周辺化されており、親とのコミュニケーションも非常に希薄な状態にあった。その寂しさを埋めるために、非行や暴力に走る児童の存在も明らかになった。また一方で資源をうまく活用している家庭もあった。この違いは、子どもが悪い、親が悪いという短絡的なものではなく、親の種々の資源の活用、文化資本の継承の不連続性、彼らの抱える歴史的文脈、ロールモデルの不在などに起因することが明らかになり、多角的な支援の必要性を示唆するものとなった。

最後に、これらの現状を踏まえて日本生まれの子どもたちへの「根源的な支援」を考えるにあたって、「スクール・インクルージョン（school inclusion）」という概念を導入したい。インクルージョンとは、すべての人間の社会参加の機会と能力を保障しようとする社会政策のことであり、特定の社会階層や移民などのマイノリティーを排除しないという包括的な理念として用いられている。学校における支援としては、①子どもたちがひとりひとり心も体ものびのびと過ごせる学校環境づくり、②教師間の「子どもたちを丸ごと支援するぞ」という意識改革と「一声」「一手間」の協働、③学級の中での友人関係の構築、④学習グループの成立が挙げられる。家庭における支援としては、「ダブルリミテッドからの脱出」と親子間のコミュニケーションをめざして、母語である親の言語を「継承語」として保持する教育と、学校言語となっていく日本語を伸張する教育の２つのアプローチが必要になってくる。どちらも家庭でできることには限りがあり、学校や地域社会との関わりや連携が必要になる。本論の観察対象校の地域は、残念ながら親子で通えるような学習支援の場がない。今後の大きな課題といえるだろう。

今後の課題を２点挙げておく。１点目は、子どもたちの言語や学力がどのように変化していくか、その変化が学校生活、家庭生活にどのような影響を与えるかを断続的に縦断的に観察し、よりよい支援を探るというもの、２点目は、

マイノリティの子どもたちが胸を張って生きていける学校づくりを目指した学校文化の制度変革、教師や児童の意識改革、学力達成を保証するカリキュラムを作るというものである。そのような学校制度を構築していくには、日本という国が多言語主義、多文化共生を推進し、ニューカマーを初めとする移民の言語を「言語資源」（中島 2005）として位置づけることが必要とされる。彼らの言語を保持、伸張することは、彼らにとって有益であるだけでなく、受け入れるホスト側である日本にとっても貴重な「資源」となるのである。カナダやアメリカではこの「言語資源」という概念が、継承語教育の興隆の原点にある。

本論では、日本語で日常会話ができるがゆえに、支援の必要はないと見なされている日本生まれの中国帰国者三世・四世の子どもたちが、じつは学校や家庭で周辺化されているという状況をフィールドワークでの観察をもとに記述した。その背景には、子どもたちが日本語も中国語も年齢相当に発達していないダブル・リミテッドの状態であること、この状態や要因が学校や家庭で正しく認識されていないこと、など種々の要因が複合的に絡み合っている。さらに、これまでの編入児童に行われてきた支援のほとんどが有効でないこと、根源的な支援が必要であることを考察してきたが、支援についてはまだまだ議論の余地がある。しかし、支援の必要性があることを訴え続け、現場の教師に少しでも意識化してもらうことが必要であると考える。子どもたちの発達に「待った」はない。一人ひとりが自分に自信を持ち、笑顔で学校生活を送ってほしいと心の底から強く願うものである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本生まれの中国帰国者三世・四世の子どもたちが様々な問題を抱えながら学校生活を送っている点を明らかにし、その教育問題を学校と家庭の両側面において、多角的かつ包括的な視点から捉えている。高橋氏は実際の小学校生活で彼らと共に時間を過ごし、フィールドノートを書くことによって、これまでの研究ではほとんど触れられなかった日本生まれ子どもたちの実際の日本語力や学力について、実際のデータをもとに量的な側面からもアプローチを試みている。特に言語問題においては、「ダブルリミテッド」「継承語」という概念を用いて問題を浮き彫りにしようとした。

考察においては、彼らが授業についていけない背景には、努力不足という個人に還元される要因ではなく、両親、祖父母を含む「中国帰国者」ならではの要因が複合的に絡み合い、それらが世代を超え、姿を変えて三世・四世の教育問題として立ち現れていることを明らかにしている。これらの問題の解決には、学校での日本語教育や学力補償だけでなく、家庭も含めた子どもたちへの言語教育が重要だが、解決策を具体的に提案した点においても意義がある。今後、一層増加するとされるニューカマーとその子どもたちへの学校教育及び言語教育を考える上で貢献できると考えられる。

先行研究においてニューカマーの子どもたちの問題が語られるとき、それは現場の担当教師や放課後のボランティア教室の担当者などが主であった。本研究では、入るのが難しいといわれる小学校において、高橋氏が第三者として関与して、２年にわたり定期的に長期的に参与観察を行った点を評価したい。これは方法論的に、従来、研究者がフィールドワークにおいて「その場にいないもの」として存在しなければいけなかったのに対して、最近は、「今ここに関わる自分」を重要視し、「関わることによって対象者も研究者自身も変化する」と考え、実践したものである。また、これまで対象とされてきた子どもたちは、日本語以外の母国語を持ち、第二言語として日本語に接触した児童であったが、本論で対象とされているのは、日本生まれの児童である。中国語と日本語の二言語に同時に接触する環境において成長した彼らが、実はどちらの言語も年齢相当の言語力を獲得できなかった点を、テストなどの結果のみに頼るのではなく、主な活動場所である教室において先生や他の児童との相互作用を軸に捉えた点に本論文のオリジナリティがある。

以上のように、本論文は、これまで看過されてきた日本生まれの帰国者の子供のことばの問題を取り上げ、参与観察という新しい方法を取り入れて調査研究し、問題解決の具体的かつ現実的方策を提示するなど、今後増えると思われる児童の教育に貢献すると考えられ、博士（言語文化学）の学位論文として十分価値のあるものと認められる。

【２】

氏　　名	森（もり）　朋子（とも こ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２１５０５　号
学位授与年月日	平成 19 年 6 月 28 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学　位　論　文　名	**大学初年次における授業デザインの構築－協調学習のエスノグラフィーより－**
論文審査委員	（主査） 教　授　岩根　　久 （副査） 教　授　中　　直一　　教　授　岩居　弘樹

論　文　内　容　の　要　旨

なぜ大学で初修外国語を必修で学ばなくてはならないのか。なぜやりたい人だけが学ぶ、完全選択制ではないのか。

本論文は、学生から発せられた〈なぜ大学で新しい外国語を必修で学ばなくてはならいのか〉という問いをそのまま大きな研究課題とするものであり、その答えを言語教育の視点から捉えるのではなく、本質的に実践現場の学びの場としての授業に貢献することを目的に、教育学からのアプローチを試みる。そして授業環境デザインとインストラクショナルデザインという２つの観点から初年次初修外国語教育の授業デザインと考察する一つの例として、本論文ではドイツ語教育を詳細に検討する。

１章ではドイツ語の授業でも、大学における授業に限定し、その意義の歴史的変遷を追う。日本のドイツ語教育は、実学から教養へとその意義を変容させながらも、常に〈言語を習得する、言語構造を理解する〉という立場は不動であった。それは初修外国語教育が教養教育であってもある一定の独自性を保持していたからであり、比較的、教養教育研究や教育学の影響を受けにくいことも理由の一つとして挙げられる。しかしそれでは一般語学学校でのドイツ語授業と、明らかな差異が認められないことから、本論文では大学だからこそ実現できる外国語教育をドイツ語を例に検討することを試みる。

２章では、学生が教養教育の第２外国語教育に抱く思いや、その位置づけを、フォーカス・グループインタビューという手法を使って抽出した。その結果、以下のことが明らかになった。

１）概ね、学生がドイツ語を選択した理由は受動的であること
２）学生の中で、第１外国語の英語と第２外国語のドイツ語ではその位置づけに大きな差がみられること
３）既習外国語、この場合は第１外国語の英語であるが、それに比べて、学生が教師から受ける影響は大きいこと
４）ロールプレイではなく、ドイツ語を用いた必然性の高いコミュニケーションが望まれること。
５）学生が、大学卒業間際になって、自律能力・コミュニケーション能力など一社会人として基本となる能力が不足していると認識していること

このように社会的ニーズとして中央教育審議会の答申『新しい時代における教養教育のあり方』から理解される教養の重要な要素は、学生からの要望でもあったことが分かった。このような双方が求める教育的効果は、他者の存在

をなくしては実現が不可能であり、外国語学習を個人発達論から他者との関係発達論として、新しい視点で見直すよう主張する。

３章では、学習効果に加えて教育的効果が高いといわれる協調学習を、授業環境デザインとして初年次初修外国語教育に導入する可能性を論じる。協調学習は、単なる学習形態を指すのではなく、社会的構成主義の学習理論を背景として据えている。学習は個人の所産物であるとするこれまでの個人発達論的な学習観からパラダイム転換し、学習は社会的状況に大きく依存しており、対人・対物の関係性の発達の中から生まれることを理念としていることから、大学入学試験後の大学１年生に協調学習を導入するのは適切であると考えた。協調学習の教育的効果の中でも特に大学１年生に有効だと思われるのが、学習への動機付けとメタ認知能力の育成である。これまでの人間関係が一度崩され、新しく構築されるであろう大学１年生にとって、社会的動機である親和動機は、学生を学習への内発的動機に導く。これは学習という認知行動が、学習者の情意面に大きく異存しているからである。またメタ認知能力は一つの技能であって育成が可能である。しかし自らの学習スタイルを築くそのプロセスも、学習者の情意面からの影響を避けることはできない。そのような意味において、協調学習は認知、技術、情意面の３つが支えあう、包括的な学習理論であると言えるだろう。

さらに３章では実際に行われている協調学習の効果と問題点を抽出するために選択した調査方法のエスノグラフィーについて、その意義と調査観について述べる。

著者は参与観察によるフィールドワークを大きく２つに分けて理解をしている。第１は教室の出来事を観察して記述し、その文化的意味を解釈するエスノグラフィーである。この場合は、直接的な実践への関与は行われない。この際には、〈外〉からではなく、自らの影響も含め、間主観性を開示することになる。本論文では、協調学習を１年間観察し、その知見を得た４章のエスノグラフィーがこの種である。第２は批判的エスノグラフィーである。研究者によるアクション・リサーチとも言われる。この方法においては、授業研究をする研究者が実践を担当する教師と協働し、授業方法やカリキュラムの改革に関与し、その過程自体を研究方法とする。本論文内では５章がこれに当たる。このように授業実践に関わる研究者は、実践者である教師と活動の課題と文脈を共有している。研究者は、積極的に場に参加し、良い方向に改革しようと常に努力を行い、その関与の事実も踏まえて〈場〉と〈活動〉の変容の過程を観察し記述する。その際に、研究者自身も大いに影響を受け、自分自身の変容もその研究対象となりえる。その意味において、教師と研究者の関係は対等であり、一方的に教え教わる関係ではない。ともに学びあう関係なのだ。

４章ではＫ大学でのエスノグラフィーを記述した。著者は観察によって学びの共同体である学生コミュニティーの１年間の変化を追った。授業実践は担当教師のみ行った。授業が開始した直後に行ったインタビュー予備調査では、インタビューを受けたほとんどの学生が、与えられた〈大学生〉という社会的アイデンティティにあわせて、意識的に自らの学習方法を変えようとしていることがわかった。しかし同時に、長年、暗記中心の個人学習が身についているために、なかなかその転換は容易ではない。授業の中の必要性が明らかになった。また大学入学試験の結果が、入学以後の学習の動機付けに大きく影響を及ぼしていることもわかった。全ての学生が希望を持って大学生活をスタートさせているわけではない。心理的なケアが不可欠である。

このような状態でスタートした前期は、ほぼすべての学生が新しい人間関係を構築しなくてはならないことから、協調学習の中でも親和的動機付けの影響が色濃くでる半年になった。休み時間のみならず、授業中であってクラスメイトとの相互関係の上に学習が成り立つため、少人数制授業が少ない大学１年生の教養教育においては、この調査対象のドイツ語授業が、高等学校時のホームルームのような役割を担った。このためにドイツ語学習にはそれほどの意欲がなくとも、仲間に引きずられてドイツ語学習を〈ついついしてしまう〉状態が観察された。

夏休み以降の後期には、学生は大学生活において、ドイツ語授業以外の居場所が多くなってきた。ホームルーム化が崩壊していく。元々学習動機がそれほど高くない学生は、親和動機の求心力が弱くなるにつれて、ドイツ語授業そのものへの興味も薄れていった。このように前期には、大きなひとつの学習共同体であったクラス内の学生たちが、その状況に合わせてグループ化されていく。このことにより、学生がドイツ語授業をどのようにポジショニングしているかが明らかになった。学生自身とドイツ語授業の間にかかっているフィルターの数が少なければ少ないほど、その学習者の学習への動機付けは状況によって左右されない。その場合は、将来の自分とドイツ語学習が直結している場合のみで、それ以外の学生は、ほとんどがクラスメイト、教師、学習課題などの要素のフィルターによって、その日の学習が左右されている。

必修の初修外国語では、この学生たちの状況を参考にして、授業デザイン、またインストラクショナルデザインを整える必要があると考えられる。

４章で得た知見を参考に、５章では実践の現場であるＯ大学の必修第２外国語としてのドイツ語に、協調学習の授業デザインを導入した。またインストラクショナルデザインでは、メタ認知能力の育成を中心に、６種類の仕掛けを授業内に導入した。それらの仕掛けや授業デザインの効果を常に形成的に評価し、常にインストラクショナルデザインを調整するために、一般的なADDIEモデルの中でも、評価に重きを置くGagneのADDIEモデルをインストラクショナルデザインとして採用した。その結果、プロジェクト前のアンケートでは、ドイツ語学習に積極性があまり見られない学生たちであったが、プロジェクト後アンケートでは96%以上の学生が〈積極的に参加した〉以上の自己評価を行っている。また社会に直結した授業デザインとしての協調学習は、学生の新しい学習観を提示し、初年次教育として大きな役割と果たしたと思われる。これらの教育的効果は、十分学習効果にも影響をしていると考えられるが、発音に重点を置いた今回のインストラクショナルデザインでは、認知領域の代表ともいえる文法理解への効果は調査対象に入っていなかった。この点を次回のデザインのニーズ分析とし、２年目にはより改善されたインストラクショナルデザインを目指した。このようにデザインの循環的評価を繰り返し、さらにデザインの洗練化をすることによって、ケーススタディーである事例研究からひとつの新しい理論構築が可能となると考えられる。

本論文はこのように前半で初年次初修外国語教育としてのあり方に関して知見を得て、後半には実際に導入したその過程を報告する。著者の立場も、静的な参与観察から、より動的な教師との協同と立場を変えることによって、教育における理論と実践の架け橋の一旦を担う研究活動を試みる。

論文審査の結果の要旨

森朋子さんの学位請求論文「大学初年次における授業デザインの構築－協調学習のエスノグラフィーより－」は、大学の初修外国語教育の現場から得られたデータをエスノグラフィー的手法を援用し分析することにより、大学における初修外国語の意義を教育学的な観点から明確に位置づけるとともに、その効果的な授業デザインのあり方を提起するものである。

本論文は、受講者たちが抱く素朴な疑問「どうして大学で初修外国語を学ぶ必要があるのか」を研究の出発点とする。まず、大学における初修外国語のひとつであるドイツ語に着目し、高等教育機関におけるドイツ語教育の様態を通時的に概観した後、現在の大学におけるドイツ語教育のあり方について検討するために、フォーカス・グループインタビューという手法を用いて受講者自身による初修外国語の位置付けを抽出する。ここで、論者は大学における初修外国語の意義を、他の語学教育機関における外国語教育や既修外国語教育と差異化すべく、人格形成期における転換教育としてとらえ、転換教育の要となる学習動機の内在化とメタ認知能力の育成に最も有効と考えられている「協調学習」という授業方法に着目する。そこで、まず、協調学習を導入しているＫ大学の授業をエスノグラフィーの手法を用いて綿密に分析し、問題点を明確化するとともに、新たな授業環境モデルを導出する。さらにその授業環境モデルに基づいた授業デザインを教員の協力のもとにＯ大学の授業に導入し、再びエスノグラフィーの手法を用いてその効果を評価し、ここから、インストラクショナルデザイン（教育手法）をコアとして、個々の授業環境（教員、学生、学習目標、物理的環境、カリキュラム等）に応じた授業デザインを循環的に構築するためのモデルを導出している。

本論文の分析において高く評価すべき点は、既成の理論を単に検証するのではなく、授業現場から得られるデータをもとに、批判的に新たなモデルを丹念に構築していく姿勢でる。論文前半においては「協調学習」という枠にとらわれすぎる論の展開となっている難点も見受けられるが、後半部においては、その欠点を克服しその枠を超えた結論を導出するに至っている。また、欲を言えば、論文付録資料をさらに有効に活用する論じ方をすれば、論の展開が堅固になったであろうし、ドイツ語以外の初修外国語のデータについても分析すればモデルの有効性も高まったであろうが、本論文はその成果を現場に還元し得る先駆的な研究として非常に高く評価できる。

以上により、本論文は博士号学位（言語文化学）論文として十分価値あるものであると認める。

【３】

氏　　名	島　田　美　和（しま だ み わ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２１５０６　号
学位授与年月日	平成 19 年６月 28 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学　位　論　文　名	**中国の「辺彊」問題－日中戦争期における内モンゴルをめぐって－**
論文審査委員	（主査） 教　授　深澤　一幸 （副査） 教　授　中　　直一　　准教授　ヨコタ村上孝之

論　文　内　容　の　要　旨

課題

本研究の目的は、中国において本格的に近代国民国家建設が始まった 1928 年の国民政府成立から統合への意識が最も高まった日中戦争の終了の時期（1928 年～1945 年）における国家の統合と分裂の問題を明らかにすることである。そこで本研究では、日中戦争期（前後の時期を含む）における西部内モンゴル地域の事例を通して、中国の統合と分裂をめぐる複雑な要因について考察してきた。従来の研究では、中国の国民国家形成過程における少数民族地域の問題を扱う場合、中国の中央政府と少数民族地域における民族主義者との対立を中心に国家統合とエスノナショナリズムの問題が取り上げられてきた。そこには、ア・プリオリに漢族－少数民族の対抗軸が描かれていた。しかし、国民政府成立後、西部内モンゴル地域には、国民政府勢力、晋綏系地方軍事勢力者、モンゴル族の３つの政治勢力が並立していた。本研究はこのように単純化できない少数民族の中国への統合化過程を政治、軍事、文化の側面から複合的に分析を行った。また、同時に少数民族を中国へ併合させるための漢族による統治システムの構築についても検証を行った。その際、中央政府や地方政府が行う政治的・軍事的側面だけでなく、知識人や文化人による文化的側面における少数民族の統治システムの構築過程をも考察した。そうすることで、中国の政治的統合に果たした学術や文化の役割が明らかにされた。

先行研究

中国の民族問題に関する先行研究では、国際関係論や政治史の視角から、清朝から民国を経て、現在の中華人民共和国に至るまで様々な統治モデルが提起されている。（茂木 1997 年、毛里 1998 年、平野 2004 年）。国民政府期の少数民族統治は、強い中央集権的志向性を持つにもかかわらず、国内の政治権力が分散し（地方政権、共産党など）、日中戦争期における強いナショナリズムの下で国民政府への求心力は一時高まるが、終戦と共に各勢力は分散し、失敗であったとする。しかし、実際には国民政府期の少数民族政策についてあまり詳細に検証されていない。国民政府期におけるモンゴル民族主義に関する研究には、徳王による百霊廟蒙政会の成立と関東軍との蒙彊政権の樹立を考察した論考が多い（森久男 2000 年他）。国民党政権のモンゴル政策を大漢族主義とみなし、親民国派モンゴル族の動向を看過している点において革命史観を抜け出せていない（烏蘭少布 1987 年）。近年、大陸では国民党政権のへの再評価とともに、綏遠省治下におけるモンゴル族と国民党政権の協力関係が再考されている（忒莫勒 2001 年、金海・

白拉都格其 2002 年）。しかし、まだこうしたモンゴル族の自治運動は、中華民国内における中央－地方関係の中では位置づけされていない。

華北事変から日中戦争前における南京の国民政府と地方政権すなわち「中央－地方」関係を対日政策をめぐって考察したものには、周美華（2000）、光田剛（2005）、内田尚孝（2006）がある。これら諸論考では、国民党政権の勢力の一端を担い、内モンゴル政策に大きく関わる晋綏系軍事勢力者と南京中央との関わりまでは考察が及んでいない。日中戦争期、中国の少数民族政策は、外交政策と表裏一体となった国防政策でもであった。同時期に成立した内モンゴルや華北における親日政権樹立の意味を再考するうえでも、民国内に留まった晋綏系地方実力派と親民国派モンゴル族の考察は必要である。こうした課題を受け、内田（2006）が、楡林、伊盟における国民党政権とモンゴル族との抗戦体制と傅作義による綏遠社会の改革を分析した。しかし、国民党政権の対モンゴル政策への評価は、「大漢族主義」の枠組みを抜け出せてはいない。「大漢族主義」など中国の民族論に関する研究では、毛里（1998）、松本（1999）が、知識人の「民族」概念の発展過程を考察している。しかし、「大漢族主義」の代表的論者は蒋介石が挙げられ、その他の知識人に関しては看過されている。

そこで、本研究では近年大陸を中心に隆盛である学術史の手法を用い、顧頡剛を中心とした辺疆研究に携わる知識人の民族論を再検討したい。昨今、大陸における西部大開発や台湾の帰属問題が取り上げられる中で、「疆域」に対する関心も高まり、「辺疆史」「疆域・研究」「西北（西北開発）研究」が盛んである。まず、大陸では趙夏（2002）、日本では、吉開（2003）、片岡（2006）らが地理学、歴史学、社会学などの学術分野に携わる知識人が行った「辺疆」研究や「西北」研究についてすでに考察を行っている。しかし、ここでは、中央や地方の政治と学術との関係には触れられていない。少数民族地域を統治するには中央のみならず地方との協力体制が必要である。本研究では、国民党政権における中央－地方間の少数民族政策を解明するとともに、「辺疆」研究の検証を通して、知識人やテクノクラート、文化人が国民党政権の少数民族政策にいかなる役割を果たしたのか、を検討した。

１章から５章の内容

第１章では、国民党政権における「中央－地方－少数民族」の枠組みの中で、中央集権権力の拡大やその浸透過程として、省を単位とする民族「分区自治」制の実施およびその構造を検証した。綏遠省主席傅作義は、モンゴル族工作を行い、「分区自治」制度の施行とその自治組織である綏境蒙政会の設立を主導した。しかし、同時に、綏境蒙政会に参加したモンゴル族が自律的に百霊廟蒙政会から離脱し、民国へ求心性を求めていく過程も確認できた。綏境蒙政会でのモンゴル族は、軍事と教育・文化面における対モンゴル族工作を行い、国民党政権のモンゴル族政策の一端を担った。こうした経験は、抗戦期における漢族とモンゴル族の抗日民族統一戦線の基盤ともなった。また、国民党政権による内モンゴルにおける「分区自治」の実施は、戦後における少数民族地域の再編にあたり、モンゴル盟旗の復員問題とも関わり、国民党政権の少数民族自治形態の１つの類型ともなった。

第２章では、日本の華北分離工作が進行する中、国民政府と晋綏系地方実力者の「分区自治」制の施行をめぐる交渉過程を考察し、中国の「中央－地方」間における「辺疆」統治と対日国防外交の差異について明らかにした。「分区自治」制は、蒙蔵委員会と華北の軍事責任者何応欽、そして最後に軍事委員会委員長蒋介石の承認を経て決定された。この時期の中国の少数民族政策は、国民政府の対外政策に大きく規定されていた。そのことは、傅作義と閻錫山が「分区自治」実施の目的を「抗日」と捉え、早急に実施されることを望んだのに対し、蒋介石は冀察政務委員会の設立を待ち、さらに百霊廟蒙政会の存続を許可したことから確認できる。「分区自治」の実施は、関東軍の勢力を綏遠から防御するためという目的以上に、「中央－地方」の関係では、中国の国防における内モンゴルでの軍事権が、国民政府から傅作義ら晋綏系地方勢力者へ委譲されたことを意味した。

第３章では第１章と第２章で取り上げた内モンゴル問題を、北京の学術界における知識人はどのように中国の国防意識から捉え、学術を用いて内モンゴルをいかに「中国の国土」として認識しようとしていたのか、について考察した。ここでは、史学家である顧頡剛の「辺疆」観と民族の融合を唱えた「民族」観を中心に取り上げ、その分析手法が、日本の矢野仁一や傅斯年の影響を受けていることを確認した。そのことで、近現代アジアにおける日本と中国の

国家膨張過程での学術上の思想連鎖を見出すことができた。また、顧頡剛の「民族」論の形成には、日本の中国侵略への国防意識が大きく作用し、顧頡剛の「民族」論は、中央政府と地方政権の民族政策に学術的正当性を与えた。

第４章では、左翼都市文化人による「辺疆」観について内モンゴルを舞台にした抗戦映画『塞上風雲』を通して分析した。左翼都市文化人によって展開される抗戦文芸では、ストーリーの語り手と見る側の視点により、内容に変化がもたらされた。都市で迎合される舞台版「塞上風雲」は、漢族による漢族のための「辺疆」文芸であった。しかし、抗戦最前線において漢族とモンゴル族の抗日民族統一戦線が組まれた榆林文芸界抗敵協会の文芸者にとっては、舞台版にみられる内モンゴルの民族問題を描写することは好ましくなかった。映画の特長である「広域性」を踏まえ都市文化人によって執筆された脚本は、国民党政権における検閲の厳しさ以上に文化人自らの「辺疆」経験がその内容に影響を及ぼした。

第５章では、第１章、第２章、第３章、第４章の内容を踏まえ、日中戦争期榆林における国民党政権の対内モンゴル政策を検討した。その時期区分は、1938 年の臨全大会以後の前半と 1941 年の２期８中全会以後の後半に分けられた。前半期において、戦前に設立された綏境蒙政会の復活により親民国派モンゴル族が中心となって政治面や軍事面で漢族への協力体制を樹立した。また抗日民族統一戦線の提唱から楊令徳など榆林文芸界抗敵協会の文化人がそうしたモンゴル族の要望を聞き入れた。しかし、後半には国民政府の「辺疆」および西北建設計画の開始や共産党との関係悪化、そして綏遠省での傅作義勢力の復権などから、モンゴル族への要求が軍事面での人的協力から経済開発による軍需物資の獲得へ移行した。傅作義ら地方軍事勢力者の援助により重慶に中国辺疆学会が設立され、そこには、顧頡剛や国民党系辺疆工作者である馬鶴天が参加し、「辺疆」の開発を唱えた。その結果、親民国派モンゴル族の自治への意見を汲み取れず、伊盟事変が勃発したことは、国民政府の少数民族攻策の失敗であったといえる。

結論

国民党政権時期の内モンゴル政策は、地方軍事勢力者、親民国派モンゴル族、現地漢族文化人、辺疆工作者などが連携し、モンゴル族の日本への傾斜を防ぐ役割を果たしていた。それは、日中戦争期、国民政府と少数民族の間に地方政府、辺疆工作者、知識人、文化人がそれぞれの国防的観点から行った対モンゴル工作ともいえる。抗戦前期には、地方政府、辺疆工作者、知識人、文化人は、抗日民族統一戦線としてモンゴル族側との対応を個々に行っていたが、抗戦中後期には、地方政府と辺疆工作者、そして国防意識の強い知識人などによる辺疆学会が設立され、国民政府への政策提言を行うまで発展した。すなわち、日中戦争期における国民政府の少数民族政策は、必ずしも中央政府や地方政府によって専ら担われていたのではなく、辺疆工作者、知識人、文化人の文化的、学術的システムによってその政策を補完されていた。そして、中央と地方政府の政策と、学術と文化における統合システムが相互に作用し、抗戦中期に至って辺疆学会の設立へと集約された。

もちろん、こうした背景には、本研究で明らかにしたように、抗戦前における地方政府、知識人などの「辺疆」地域との深い関わりの蓄積があったことも重要である。本稿では、こうした戦前から戦後にかけて通底した国民党政権による少数民族の統合システムいわゆる「大漢族主義」の多様性を解明した。

論文審査の結果の要旨

本論文は、中国において本格的に近代国民国家建設が始まった 1928 年の国民政府成立から統合への意識が最も高まった 1945 年日中戦争終了までの時期における国家の統合と分裂の様相を、西部内モンゴル地域の漢民族とモンゴル族などが複雑にからみあう事例を通して明らかにしたものである。

本論文の全体として特筆すべき点は、きわめて明確な問題意識をもって、当該時期の当該地域に関する資料、それはかなり限られており、しかも収集するのが困難なものばかりだが、それを日本、中国、台湾にわたって、これ以上は不可能とまで言えるほどに広く緻密に調査・収集し、そうしたオリジナルな一次資料にもとづいて、厳密なそれゆえに説得力をもつ歴史記述を行ったことにある。それはとくに第１章、第２章に顕著である。

また、これは上記の厳密な歴史記述と関連することだが、この時期の西部内モンゴル地域を論じた従来の研究では、その研究の視角が単純で、だいたいは漢民族と非漢民族、つまりモンゴル族との対立という面から、出現した事象を捉えがちであった。しかし本論文では、この漢民族と非漢民族とのあいだに、軍事勢力者、いわゆる軍閥の介在を設定することにより、この地域の歴史事実を格段に明確にし、理解をより容易にしている。

さらに、第３章では、北京の学術界の代表的知識人たる顧頡剛の「民族」論を、第４章では、左翼文化人により作成された内モンゴルを舞台とする抗日戦争映画「塞上風雲」をとりあげ、当時の知識人たちのあいだでの「辺疆」観と日本の中国侵略に対抗する国防意識との関連を、きわめてわかりやすく説得的に叙述し、この時期の歴史を言語文化の視点から照射するものとなっている。

ただ不足をいえば、歴史記述を主体とした第１章、第２章と文化的側面を強調した第３章、第４章とのつながりがあまり整合的でない、第３章第４章の中心となる「辺疆」という概念については個々の事象の羅列に止まり理論的問いかけが足りない、といった点が惜しまれる。しかし、これらは本論文全体の価値をいささかも損なうものではない。

以上のように、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分価値あるものと認められる。

【4】

氏　　名	朴（パク）　珣（ス）　英（ニョン）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２１５０７　号
学位授与年月日	平成 19 年６月 28 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学　位　論　文　名	Frederick Douglass and His Strategic Application of Masculinity to African American Liberation （フレデリック・ダグラスの黒人解放運動におけるマスキュリニティ戦略）
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　仙葉　　豊 （副査） 教　授　ジェリー・ヨコタ　　准教授　森　　祐司

論　文　内　容　の　要　旨

今日のアメリカ合衆国における黒人・白人間の人種的対立や緊張関係の主たる要因は、歴史的にみると建国当初から制度的矛盾をはらみつつも存続してきた黒人奴隷制度にある。19 世紀は 17 世紀の植民地時代から存在する黒人奴隷制度がさらに発展し強化された時代であった。その一方で、南北戦争によって奴隷制度が完全な廃止へと導かれた時代でもあった。このように 19 世紀は南北戦争を分岐点に、黒人にとっては零落状態から人間性を回復しながらも、根強く残る差別と苦難を乗り越える方策が必要とされ、白人にとっては従来自明の理とされてきた白人至上主義に陰りが射し、新たな対抗言説を生み出さねばならないという、文字通り激動の時代であった。そして当時の政治的・社会的位置づけにおいて、また現在までの黒人解放運動（奴隷制廃止運動、黒人の権利獲得運動を含む）への影響において、最も傑出した黒人はフレデリック・ダグラス（1818-1895）であろう。ダグラスはアメリカ南部プランテーションに奴隷として生まれ、20 歳の時に逃亡し、その後、自由の身分を獲得し黒人解放運動に一生をささげた人物である。

奴隷制存廃に揺れる 19 世紀中期は「野蛮で暴力的な黒人像」と「臆病な黒人像」が白人の都合に応じて選び取られ、黒人男性のマンフッド、すなわち人間性と男性性は完全に否定されていた。そのような言説がまかり通っていた時代であるからこそ、ダグラスは黒人の解放と社会的地位向上のためには黒人男性のマスキュリニティを強調することが有効であると考えた。現在、ジェンダー論的観点から、ダグラスは男性優位主義者であるという批判もある。しかし 19 世紀という時代背景と女性の地位向上運動へのダグラスの積極的関わりを考えると、現代の視座から単純にダグラスを批判することはできない。

19 世紀アメリカにおける黒人男性のマンフッドの否定は、黒人女性のウーマンフッドの否定とも表裏一体の言説であり、黒人全体の人間性の否定へとつながっていた。よって今日におけるフェミニズムやジェンダー論による「黒人女性を抑圧する黒人男性像」的解釈と同列に扱うことは不可能である。19 世紀の黒人・白人間の人種問題は同時代においても、ときにジェンダーの比喩のフィルターを通して論じられることがしばしばあった。すなわち黒人男性が「女性化」されることで、人種全体としての「黒人」が「女性」と規定され、その対極として男女を問わず「白人」が「男性」と社会的に位置づけられたのである。このように人種をジェンダーの位置づけで捉えたとき、必ずしも白人女性

が白人男性に抑圧されているという構図ばかりでなく、実は人種としては「男性」である白人女性が白人男性と共に、「女性」である黒人全体を貶める趨勢に加担していたとも考えられる。

前述のような人種のジェンダー化を背景に、本論文では黒人全体の地位向上に、ダグラスの用いたマスキュリニティ言説がいかに攻治的に有効に働いたかということを探る。決して黒人男性の優位性を立証することが目的ではない。既往の研究ではほとんど扱われることのなかったダグラスのマスキュリニティ戦略に着目する。そして、ダグラスがいかに巧妙なレトリックを用いて黒人男性の「存在しないはず」のマスキュリニティを構築したかを論じる。本論文はダグラスのマスキュリニティを利用した黒人解放運動の手法を中心に、ダグラスの歴史的意義と今日的意義を明らかにしようとするものである。

本論文は４章からなり、以下のように論じられる。第１章、第１節ではダグラスの最初の自伝である『ナラティヴ』（1845）における２つの挿話、「アント・ヘスターの鞭打ち」と「コウビーとの戦い」に着目する。これらの記述の分析を通して、白人による黒人男性のマンフッド否定が実は黒人女性のウーマンフッドの否定と表裏一体であることを示し、ダグラスが自身のマンフッド回復の逸話を通して、活動家としての初期の段階で曖昧さを残しながらも意図的にマスキュリニティ言説を形成したということを明らかにする。第２節では前節で示されたダグラスのマスキュリニティ言説の曖昧さが、黒人の力による抵抗を極端に恐れる白人読者への配慮と、さらに指導者であったウィリアム・ロイド・ギャリソンの無抵抗主義への配慮からであった点を指摘する。そしてダグラスがギャリソン派から決別するに至った経緯を、当時のマンフッドの要件でもあった政治的・経済的・精神的自立の観点から考察する。ダグラスとギャリソンの間に決定的な不一致を生み出したのが、当時の宗教的・文化的イデオロギーであった「アメリカン・ジェレマイアード」に対する態度の差にあったということを論じる。

第２章、第１節ではギャリソンとの決別の一因ともなった合衆国憲法に関するダグラスの解釈の変化を考察する。そしてその憲法を起草した建国の父祖たちを、当時の望ましいマスキュリニティの体現者とする社会的コンセンサスを踏まえて、いかにダグラスがアメリカ建国の基本理念を援用することで黒人解放における暴力の使用を正当化し、暴力とブラック・マスキュリニティとを結び付けたかを論じる。第２節ではダグラス唯一の中編小説「英雄的な奴隷」（1853）に焦点を当てる。これは黒人解放への姿勢が最も闘争的で過激であった 1850 年代のダグラスを特徴付ける作品である。アンクル・トムに代表される黒人の女性化のステレオタイプを反証し、白人にとって「存在しないはず」のブラック・マスキュリニティを証明して見せたのが、この小説である。作品中の建国の理念援用は支配文化の権威に回収されていく概念的な罠も存在するが、いかにダグラスがその危険を回避するために、建国の父祖のイデオロギーを「未完了の独立革命」という黒人解放のイデオロギーに変容させたかを、レトリックの分析を通して論じる。合衆国の法的枠組みの範囲内で憲法を遵守する思想のもと黒人解放を「未完了の独立革命」と位置づけることは、後の 20 世紀の黒人指導者である W・E・B・デュボイスや公民権運動を指揮したマーチィン・ルーサー・キング Jr.らに先んじるものであった。

第３章、第１節では南北戦争の勃発により、新たな局面を迎えることとなったダグラスのマスキュリニティ言説を考察する。ダグラスは戦争開始と同時にいち早くその大義を奴隷解放と位置づけた。第１節ではダグラスが南北戦争を機に、ブラック・マスキュリニティ言説における武力行使を政治的に安全性が確認された形へとつなげていった過程を考察する。奴隷解放（予備）宣言を経て、黒人連隊編成へと、黒人にとって歴史的事件が起こるなか、いかにダグラスが 50 年代には構築し得なかった、時宜を得た明確なマスキュリニティ言説を打ち立てたかを論じる。第２節では黒人の白人への抵抗の言説としてのマスキュリニティが、時に黒人男性のマンフッドの強調として現われたという議論を踏まえ、黒人女性もまたブラック・マスキュリニティの構築に寄与した事実を明示する。その上で、３章までに論じてきたダグラスのマスキュリニティ言説がいかに関わるのかを論じる。

第４章、第１節では既往の研究では南北戦争後は失われたと考えられてきたダグラスのマスキュリニティ言説が、実は彼の晩年まで一貫して存在していたことを指摘する。南北戦争後、再建期を経て南北の和解が成り、南北戦争の大義は次第に失われ、その記憶をめぐる議論から黒人は除外されていった。そういった状況の中で、ダグラスが著したハイチ独立の指導者であるトゥサン・ルヴェルチュールに関する未発表の原稿と、黒人雑誌に掲載されたルヴェルチュールに関する記事をもとに、ダグラスのマスキュリニティ言説の変容をたどる。すなわちダグラスはトゥサン・ルヴェルチュールに代表される理想的黒人のヒロイズムを 18 世紀サント・ドミンゴ（現ハイチ）に限定されたもの

から、100 年後の世紀転換期のアメリカに敷衍させたのである。第２節では黒人女性の問題と関連させ、黒人男性のリンチにおけるジェンダーやセクシュアリティの観点から、ダグラスのアイダ・B・ウェルズとの関わりを通して、彼の最晩年のマスキュリニティ言説を明らかにする。また 1893 年のシカゴ万博においてアメリカの黒人が排除された事実に対しダグラスが著した文書をもとに、ダグラス最晩年のマスキュリニティ言説を探る。

以上のような議論を踏まえ以下の結論に至る。ダグラスのマスキュリニティ言説は、彼の論じるマンフッドという言葉から想起されるジェンダー論的考察のみによって明らかになるものではない。彼のマスキュリニティ言説とは文化的に規定される「男らしさ」の規範を超え、「人間性」にまで広がりを持つものである。それは「人種」によってジェンダー化された視点を通し、また時に生物学的性差やセクシュアリティまでも戦略として用いることで、19 世紀のアメリカで抑圧されていたマイノリティ集団としての黒人全体を解放しようとする試みであった。そしてダグラスのマスキュリニティ言説は時を経ながら変容しつつも、その影響力は失われることなく、20 世紀の黒人指導者たちへと受け継がれていったのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、19 世紀後半のアメリカの傑出した黒人解放運動家であったフレデリック・ダグラス（1818-1895）の解放運動戦略を、「男性性」（マスキュリニティ）という観点から一貫性をもって論じたものである。彼の生涯を、代表的な作品である *Narrative of the Life of Frederick Douglass, an American Slave, Written by Himself*（1854）と *Bondage and My Dreams*（1855）などを中心にたどりつつ、彼の他のジャーナリストとしての活動や、最晩年の手稿研究などをからめて論じたものであり、バランスの取れた、しかも新しい知見を織り込んだ刺激的な研究として高い評価を与えられた。

第１章では、ダグラスの最初の自伝であった『ナラティヴ』における青年期の２つの挿話を分析しつつ、彼の「マスキュリニティ」に対する初期の考え方が分析され、彼の黒人奴隷としての弱さと無力感がその解放運動者としての出発点にあったことが示されている。ここでは、彼の「マスキュリニティ」の曖昧性が、黒人の力による抵抗を恐れる白人の意識や、無抵抗主義を奉じる他の運動家たちとの関連から丁寧に分析されているところが注目される。

第２章では、合衆国憲法に対する解釈を通じて、アメリカ建国の基本理念を援用することで黒人解放運動にある程度の暴力はやむなしとの意見に到達したダグラスの暴力とマスキュリニティの関連が論じられている。ここでは、ダグラスの唯一の中編小説である『英雄的な奴隷』（1853）とよく知られた『アンクル・トムズ・キャビン』（1852）との比較が、前者の男性性と後者の女性性との対比の観点から論じられているところが新鮮である。また、第３章では、南北戦争およびその後のダグラスの「男性性」が奴隷解放と黒人連隊編成などの歴史的事件との関連で述べられ、ブラック・マスキュリニティ言説における武力行使を政治的に安全な形態につなげていくダグラスの政治姿勢が指摘されている。

この論文で最も高く評価されたのが、第４章であった。この章では、サント・ドミンゴ（現ハイチ）の独立指導者だったトゥサン・ルヴェルチュールに関する、ダグラス晩年の書きものを丁寧に分析しながら、従来はあまり考察されることのなかったダグラスの最晩年の思想を新たに掘り起こしている。2004 年に完結したばかりのダグラスの未発表草稿のファクシミリ版を丹念にリサーチし、1893 のシカゴ万博における黒人排除への批判など当時の時代背景を織り交ぜたこの章の分析は見事なものである。

以上のように、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分価値あるものとみとめられる。

【５】

氏　　名	上　仲　　淳（うえ　なか　じゅん）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２１５０８　号
学位授与年月日	平成 19 年 6 月 28 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学　位　論　文　名	**中国語を母語とする上級日本語学習者のスピーチレベルとシフトに関する研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　三牧　陽子 （副査） 教　授　沖田　知子　　准教授　田畑　智司

論　文　内　容　の　要　旨

我々は言語使用の際、対話相手や状況や場面に応じた言語行動を行っている。日本語を使用して話す場合、適切な「スピーチレベル（文末の「です/ます」の使用・不使用と語彙の待遇度）」の選択とその切換えという問題は避けては通れない。日本語を母語としない日本語学習者にとって適切なスピーチレベルの使い分けは最も習得が難しいものの一つであると考えられている。本研究では、そのような日本語学習者に見られる中間言語的なスピーチレベル管理の様相に注目して分析と考察を行った。

本研究の目的は以下の三点である。まず一点目は、目本国内で 60%以上を占め最も人数が多いとされている中国語を母語とする日本語学習者のうち、ある大学に所属する留学生を調査対象者とし、彼らを取り巻く社会的ネットワークの中から日常生活で遭遇する日本語母語話者（以下 NS）との接触場面を抽出する。そしてそれらの接触場面においてスピーチレベルをどのように使いわけているかを調査し、スピーチレベルの選択基準とシフト管理における中間言語的な特徴を明らかにすることである。これは第４章と第５章の内容となる。次に二点目は、先行研究で留学生のスピーチレベル・シフトの要因としてこれまでに指摘されなかった事柄を、調査対象者のデータとフォローアップ・インタヴューから見出すことである（第５章）。そして三点目は調査対象者に共通して見られたシフト管理のある特徴が、一定の期間を経た後にどのように変化したか縦断調査を行って明らかにすることである。これは第６章の内容となる。

本研究の意義は次の二点である。従来のスピーチレベルの研究は調査者によって作為的に組み合わされた対話相手との実験室における談話データを扱ったものがほとんどで、調査対象者の私生活で日常的に行われている生の談話を扱ったものは極めて少ない。管見の限りでは石崎（2002）のみである。したがって本論のように調査対象者の社会的ネットワークを構成している実際の接触場面で行われた会話をデータとした研究が必要である。もう一点は、将来的な一般化に向けて示唆を与えうるケーススタディとしての役割である。本論で明らかになった結果を、今後検証を重ねることによって日本語教育に応用していきたいと考えている。

次に本研究の調査の概要を述べる。まず調査対象者は、スピーチレベルと敬語の部分的コントロールが可能であるとされる上級レベルの、中国語を母語とする日本語学習者３名（C1、C2、C3）とした。関西の某大学（以下 A 大学）に在籍し、年齢は 20 代後半から 30 代前半で、いずれも３年から３年半の日本語学習歴を持つ。A 大学の留学生が男

性よりも女性のほうがかなり多かったことから女性を調査対象者とし、ジェンダーを統一することによってスピーチレベル管理の特徴を比較しやすくした。各人の社会的ネットワークの中から会話を録音する相手を相談して決め、自然な会話を録音してくれるように調査対象者に依頼して IC レコーダを貸し出した。対話相手となる NS には可能な限り筆者が事前に協力の依頼をして了承のもとに会話を録音した。もしくは会話採集依頼の書類を調査対象者に持たせて録音前あるいは録音後に了解を取った。録音中は IC レコーダを見える場所に配置して録音した。ポケットに入れておいた場合は録音後に NS にその旨伝えた。そして約１週間後にレコーダを回収して会話を書き起こし、２週間以内にフォローアップ・インタヴューを行った。

スピーチレベルは文末のスピーチレベルと語のスピーチレベルに大きく分けられるが、本研究では、特に文末のスピーチレベルに注目し、丁寧体（「です/ます体」の使用、＋）と普通体（「です/ます体」の不使用、０）の２分類とした。付随的に、語のスピーチレベルについても、「狭義の敬語（尊敬語や謙譲語）、＋」あるいは「軽卑語、－」があった場合、言及した。また本稿では方言形もスピーチレベルに含めて考察した。以下調査結果を述べる。

第４章では調査対象者のスピーチレベルの選択について分析と考察を行った。その結果、調査対象者のスピーチレベルの選択基準として、「丁寧体使用の基準」と「普通体使用の基準」があり、それぞれ３つのサブカテゴリー（「対話相手に関する基準」、「状況に関する基準」、相手の言葉に合わせるという「アコモデーションの調整」）に下位分類して整理した。各々のカテゴリーには NS と共通の要素だけでなく調査対象者に特有の要素も含まれ、例えば丁寧体使用の基準として、C3 が自分の言葉遣いに対して厳しい相手に丁寧体を使用するというような独自の基準も見られた。丁寧体と普通体の選択基準にコンフリクトが生じた場合は、いずれかに優先順位を置く必要があるが、各調査対象者によって個人差が認められた。例えば、C1 が社会的上下や役割関係よりも心的距離を優先したのに対して、C2 は社会的上下や役割関係を優先した。スピーチレベルの選択基準には他に「コミュニケーションの達成に関わるストラテジー」というカテゴリーも存在した。それについては、「普通体のほうが短くて分かりやすくて便利なのでなるべく普通体を使用する」など待遇面よりも機能面を重視したり（C1）、対話相手や話題の人物（第三者）に対する狭義の敬語（尊敬語・謙譲語）の使用をなるべく避ける（C1、C3）などの特徴が見出された。また、調査対象者がフォローアップ・インタヴューで述べた内容と実際の談話に現れたデータが時折食い違っていることから、「無意識的な言語使用」がしばしば行なわれていることが確認された（C1、C2、C3）。方言の使用に関しては個人差が大きく、標準語と方言または若者言葉の区別が曖昧で誤解も生じていた（C1、C2、C3）。C1 は最も方言使用が多く、C1 独自にユニット形成した中間言語的な方言形式も見られた。社会的ネットワークに関しては、アルバイト・ドメインの影響が非常に大きかった。母語文化の影響は比較的小さく、自ら習得した待遇規範意識と社会的ネットワークから受ける影響から気づきや経験を通してスピーチレベルの学びが実現されていることが明らかになった。

第５章では、調査対象者のシフト管理について考察した。スピーチレベルの一時的なシフトに関わっていると考えられる発話の種類および機能についてまとめた。「対人機能」と「談話標識機能」を有する「NS にも調査対象者にも見られるもの」以外に、従来の先行研究では明示的に指摘されてこなかった NS には見られないであろうと考えられる調査対象者に特徴的なシフト管理を中心に考察を行った。まず、全体的な傾向として、スピーチレベル管理に終始注意を払い続けることができないためスピーチレベルにゆれを生じ、予期せぬシフトが生じていた（C1、C2、C3）。このような全体的な傾向を踏まえた上で、微視的には以下の６項目を指摘した。①「です/ます」を含む、あるいは含まない会話の決まり文句が存在する（C2、C3）、②「のだ」に「です」が後接しやすく「んです」となる（C1、C2、C3）。③関西では聞きなれない「だ」を回避し「です」でしばしば置き換える（C1、C2、C3）。④語のスピーチレベル（＋）に文末のスピーチレベルの（＋）が共起しやすい（C2）。⑤疑問文マーカーとして「ですか/ますか」が使用される（C2、C3）。⑥その他日本語能力の不足が原因で、適語探索を行ったり（C2）、引用表現を上手く構文化できないためシフトに影響を与えること（C1、C2、C3）、また、第三者である話題の人物に対する狭義の敬語の不使用（C1、C3）や、社会的ネットワークの影響からジェンダーに相応しくない軽卑語の使用（C1）が見られることを指摘した。また、対話相手との心的距離の短縮が期待できる「心情の直接表出」の発話であっても、聞き手目当てとなるような場合には普通体へのダウンシフトが不適切になることを述べた（C1）。

第６章では、調査対象者に共通して見られた中間言語的な特徴、すなわち気の置けない仲の良い人物を対話相手とした際でも普通体を基調とした談話にしばしば意図的ではないアップシフトが現れる特徴について、限られたデータ

ではあるが、第一回目の調査から一定の期間をおいたのちできるだけ同じ条件の下で縦断的調査を行った。その結果、C1 は注意度が持続しないために起こる無意識的なアップシフトが前回と同様数分毎に１回程度生起していることがわかった。C2 は「のだ」の形式に「です」が後接しやすい傾向を除き、前回見られた問題点が概ね改善されていた。それに対して、C3 は第一回目の調査の結果と著しい共通点が多数見出され、多くの不必要なアップシフトの要因が改善されないまま残っていた。このようなことから社会言語学的な能力のひとつであるスピーチレベル管理能力は、C1 においてはほぼ横ばいで、C2 においては向上が見られ、C3 においては前回の問題点がそのまま改善されず残っており、化石化（fossilization）がすすんでいることが明らかになった。第一回目の調査以降の社会的ネットワークの変化に鑑みて、各人の環境の変化が言語習得にも影響を及ぼした可能性を指摘した。

以上、日本語学習者の社会的ネットワークに根ざした研究として本研究を位置づけ、調査対象者の実際の接触場面において見られたスピーチレベル管理について論じた。話し言葉における丁寧体と普通体の適切な使い分けの指導が教室で行われるのはまれである。スピーチレベルの使い分けの技能は学習者にとって非常に習得が難しいにもかかわらず日本語教育において見落とされがちな分野となっている。留学生の数が年々増加し、日本国内のあらゆる場所へと彼らの行動範囲が広がっている昨今、日本人とのよりよい人間関係構築のために適切なスピーチレベル管理の習得は避けては通れない。日本語の第二言語話者によるスピーチレベル管理の実態解明と、より効果的でシステマティックな指導法の開発、および日本人との相互理解のために、本研究のような実証的なケーススタディの積み重ねが必要であると考える。

論文審査の結果の要旨

本研究は、上級レベルの日本語学習者によるスピーチレベル管理の実態解明を目的とし、中間言語的なスピーチレベル管理の様相に注目して分析と考察を行なったものである。対話相手や状況に応じた適切なスピーチレベル（文末の「です/ます」の使用・不使用と語彙の待遇度）の選択やシフトに関する管理は、最も習得が難しいものの一つに挙げられること、また、上級になるほどスピーチレベルの不適切な使用がよりよい人間関係構築にとってリスクになりやすいことから、本研究は、より効果的でシステマティックな指導法開発の基礎研究として価値が認められる。

本研究の調査対象者は、最も日本語学習者数が多い中国語を母語とする留学生３名である。最大のオリジナリティは、従来の実験的に収集したデータではなく、アルバイトドメイン、大学ドメイン（対教員、対友人）、社交ドメインなどの社会的ネットワークをもとに、実際の接触場面における多様な生の談話を収集、分析した点にある。

その結果、複数のドメインにおける人間関係に応じたスピーチレベルの使い分けはおおむねできてはいるものの、一方で独自に形成された中間言語的なスピーチレベル管理の特徴があることを見出すことに成功し、詳細に示した。その特徴として挙げられたのは、待遇面よりも機能面の重視、狭義の敬語の使用の回避、独自にユニット形成した中間言語的な方言形式の使用などである。これらの特徴形成に関する考察では、母語文化の影響よりも長時間接触するアルバイトドメインの影響が非常に大きいこと、および、自ら習得した待遇規範意識と社会的ネットワークから受ける影響から気づきや経験を通してスピーチレベルの学びが実現されていることなどを指摘した。次に、調査対象者に特徴的なスピーチレベル・シフトとして、丁寧体あるいは普通体の文末と特定の表現が固定的に使用されることによるシフトなど、従来指摘されていない特徴を明らかにした。親密な友人との普通体基調の談話にしばしば意図的ではないアップシフトが現れる現象を示すことによって、上級話者であってもスピーチレベル管理に終始注意を払い続けることの困難さを実証的に指摘した。さらに、これらの調査対象者に共通して見られたシフト管理の特徴に関して縦断調査も実施し、各人の環境の変化の差が言語習得に影響を及ぼした可能性を指摘した点も評価できる。

以上のように、本論文は、日本在住の上級日本語学習者を対象とし、従来にない方法によってスピーチレベル管理の中間言語的な特徴を分析した結果、多くの新規の知見をもたらし、日本語のスピーチレベル教育に貢献をなすと考えられる。よって、博士（言語文化学）の学位論文として十分価値あるものと認められる。

【6】

氏　　名	齊　藤　園　子（さい とう その こ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第　２１５０９　号
学位授与年月日	平成 19 年６月 28 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学 位 論 文 名	The Question of Identity in the Work of Henry James：Writing on Ghosts and Writing of Ghosts （ヘンリー・ジェイムズの作品におけるアイデンティティの問題－幽霊による、幽霊についてのエクリチュール）
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　木村　茂雄 （副査） 教　授　仙葉　　豊　　准教授　里内　克巳

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ヘンリー・ジェイムズの作品のうち、作家や芸術家に関する作品を主な対象に、アイデンティティの確立とその崩壊の諸問題を扱う。ジェイムズは多作で知られる小説家であるが、「書く」行為への洞察に富んだ作家論や小説論も数多く残している。また、作家や芸術家を題材とした作品は、「書く」活動に携わる作家としてのジェイムズ自身の存在や活動を、作中人物として客観化し省察した自己再帰的（self-reflexive）な作品といえる。ジェイムズはその執筆物において、一方では、作品の起源、所有者、帰属先としての作者の権威を表明している。しかしもう一方で、アイデンティティを確立しようとするその語りの只中に、アイデンティティ崩壊の契機が記録されていることに本論は注目する。ジェイムズの分身としての作中作家や芸術家には、アイデンティティの確立に対するジェイムズの不安が抑圧された形で刻印されているのである。

本論文は三部から成る。第一部は、テクストの表象におけるアイデンティティの問題を扱う。

まず第一章では、ジェイムズの作品中に頻出する「書かれた物」、すなわち「手書き原稿」と印刷物がどのように表象されているかに焦点をあてる。そもそもテクスト上の表象は、多くの場合、何らかの意味の起源として描かれているわけではない。たとえば、作品中の手書き原稿は作者の権威の象徴であるが、それは決して現前することがない。それは、ジェイムズ作品中の幽霊と同様、語りの中に曖昧に存在するだけである。しかしそれでも、手書き原稿は「オリジナル」として、読者や批評家の追求の対象となる。結果的に手書き原稿は、起源とその同一性を欠いたまま、語りを増殖し拡散しながら、語りの中で再生産されていくのである。

第二章では、芸術作品における表象のアイデンティティの問題を扱ったジェイムズの短編“The Real Thing”（「ほんもの」）と小説論“The Art of Fiction”（「小説の技法」）を取り上げる。“The Real Thing”においては、芸術作品における表象と現実の境界に混乱が生じている。イラストレーターを生業とする第一人称の語り手によれば、芸術作品における表象とは、現実をそのまま写し取るというよりも、「表象されたものを表象する」活動なのだ。したがって、「ほんもの」である貴族がイラストにおいて貴族を表象しうるわけではない。逆に、現実には貴族とかけはなれた庶民階級のモデルが貴族を表象しうるものとなる。ここで追求されているのは、コピーがオリジナルに取って代わるプロセスである。最終的に貴族が「何にでもなる」と宣言するように、この世界は結局コピーのみの世界であってみれば、コピーがいかにしてコピーのままオリジナルになるかという問題を追究しているといえよう。これは、

「選択と比較の問題」として芸術を扱うという、「小説の技法」におけるジェイムズの姿勢とも関連する視点といえる。しかし、「見えたものから見えていないものを推測する」というジェイムズの有名な言葉は問題も含んでいる。というのも、コピーのオリジナル化を扱う際に、形式からの解放を称揚しながら、一方では形式への希求とも思えるステレオタイプ化の傾向も見られるからである。

第二部では、特に「作者」と「読者」の間で行われる作品のアイデンティティをめぐる交渉に注目する。そこでしばしば見られるのは、作中の作者が、何らかの形で、作品に対する支配権の危機を経験するというパターンである。書くことの権威は、読まれることによってつねに覆される可能性を持っている。そもそもテクスト上の表象は、さらなる表象によってのみ理解されるのであり、作品の同一性の維持は、これらの「読み」の介入によって困難なものとなる。読む行為は潜在的に書き換えの行為なのである。作品の表象を巡って作者と読者は交渉を行うのであるが、そこで作者は作品の権威に対する独占権を主張することはできない。むしろ、読者と作者との境界自体、次第に曖昧化されていくのである。

第三章では、*In the Cage*『檻の中』を中心に、電信局で働く女性電信士による「読むこと」と「書くこと」の実践について論じる。電信士は、貴族階級と労働者階級という「構造」のギャップを象徴する電報局の檻の中にいる。電信士はそのギャップを、極端に短縮化ないし暗号化された電信文を「読む」ことによって埋めていく。そして、電信士の読みの逸脱には、読むことと書くこととの複雑な関係において現実が構築されていく過程が浮き彫りにされているのである。

第四章では、“The Middle Years”（「初老」）と“The Death of the Lion”（「流行作家の死」）を主な材料に、作家の作者としての権威が読者との関係の中で侵食されていくプロセスを検討する。両作品には、一見、作家に忠誠的な読者が登場する。こうした登場人物は、従来の多くの批評においては、作家の作者としてのアイデンティティを強化する存在と解釈されてきた。しかし本論では、作家に対し最も従順であるかのような読者ですら、作家の作者としての領域を侵害する存在であることを指摘する。たとえば、“The Middle Years”で描かれる作家デンコムは、「読み」が生み出す作者の意図からの逸脱を恐れているが、しかし読まれることがなければ、作品は完了しない。孤高のうちにアイデンティティを確立することは不可能であり、作家は読者との関係の中でしか定義されえないのだ。そこでデンコムは、潜在的な、読みという「幽霊」によって作者の権威が侵害されることを排除するため、テクストの改訂を続け、作品のアイデンティティを決定不可能な状態に保とうとする。また、“The Death of the Lion”では、作家の創造性とは無関係に機能していく「作家」という言説のアイロニーも描かれている。これらの作品の中で作家は死ぬ運命にあり、結局は書くことをやめる。しかし、実在のない手書き原稿と同様、その存在は「語り」の中で曖昧によみがえり、読者に絶えずつきまとい続けるのである。

また、第五章では、ジェイムズが晩年に出版したニューヨーク版の出版に関して、その作者と読者のアイデンティティの重複という点に照明を当てる。作中作家が読者との関係において経験したアイデンティティ崩壊の感覚は、ジェイムズ自身にも共通するものである。長年、ジェイムズ文学の象徴とみなされ、その作家としての権威を存分に発揮して構築されたはずのニューヨーク版の権威は、しかし、その権威の揺らぎにこそ基づいたものといえる。ここでの改訂の行為は、ジェイムズ自身の同一性の崩壊、そして作者と読者との間の境界の曖昧さを示している。この崩壊の感覚を持つがゆえに、ジェイムズは以前の自分と改訂時の自分との一貫性を語り、作者の強い権威を語るのである。また、ニューヨーク版の出版過程は、様々な「作者」主体の存在を示唆している。それはテクストの作者としてのジェイムズだけでなく、当時の出版業界に関わる諸主体が、その法的枠組みの中でそれぞれ作者の役割を果たすことによって実現されたものといえる。この問題は、広くは著作物における著作権の問題、装丁の問題、執筆物の所有や帰属の問題について考察を深める契機ともなるだろう。

第三部は、ジェイムズ自身の読みの実践に着目する。

第六章では、*The Aspern Papers*（『アスパン文書』）における一人称の語り手の企てについて検討する。語り手は、ジェフリー・アスパンという過去のアメリカ人詩人の文学的成果に関心を持つ読者兼批評家である。彼は、アスパンの精霊を祭る司祭の役割を自負し、この詩人を、アメリカ文学の祖として祭りあげることを試みるのである。これは具体的には、アスパンの遺稿とされる恋文を手に入れることで、過去の詩人アスパンを自身の企てに都合の良いように読み替え、また書き換えてよみがえらせる企てとなる。しかし、アスパンの恋文は、語りの中に存在するのみであり、起源を持たない。恋文は語りの連鎖の中においてのみ、そのアイデンティティを強化していく。つまりそれは、恋文の消滅を語るティーナの語り、*The Aspern Papers*という語り手の語り、さらには、この中篇を読む批評家

の語りをも生み出していくのである。

第七章では、*The Aspern Papers* に見られた語り手の読みの実践が、ジェイムズの執筆活動のパロディでもあることを論じる。特に、ジェイムズの初期の伝記 *Hawthorne*（『ホーソーン』）は、彼の強力な先行者、ナサニエル・ホーソーンのジェイムズによる読み替え・書き換えといえる。そして彼が読者・批評家としてホーソーンを批評する時、彼はホーソーンの幽霊を、彼自身が必要とする伝統の鋳なおしのために利用しているのである。ジェイムズはホーソーンを、アメリカ土着の作家でありながらヨーロッパの文化的伝統と共通する要素を持ち合わせた作家として語る。このジェイムズの語りは、その後のアメリカ文学史の語りを生み出していったという意味で、起源のない語りが持つ実効性を示しているといえよう。その一方、その鋳なおしは、西洋の「様々な国民性」を同質な型に鋳なおそうとする、ステレオタイプ化の思考をも内包している。しかし、西洋とアメリカという二項対立が打ち崩されようとするとき、ジェイムズの作品には、ぼんやりとした第三の空間があらわれる。この空間は「東方」「東洋」「中国」などといった言葉で不明瞭に指示されているにすぎない。しかし、後期に至るにしたがい、この空間はより具体的な地理的、歴史的、政治的背景とともに小説の中に取り入れられていく。最終的に、同質的なアメリカ性というヴィジョンは妄想に終わり、むしろ、ヨーロッパやアメリカの二項対立の枠組みでは捉えきれない無数の境界が立ちあらわれることになるのである。

書くことによって作家の権威を築き上げること、あるいは個人としてのアイデンティティを確立すること、そしてそのことによって、失われた「確かなもの」を取り戻そうとするモダニズム的な試みは、ジェイムズにおいては失敗に終わったといえよう。書くことによるアイデンティティ構築の行為は、まさに「書くこと」の内部において細分化され、脱構築されていく。むしろ、ジェイムズ作品が示唆する主体のあり方は、いわゆるポストモダンの主体のあり方に近いものといえよう。それは何らかの土地に根ざしたアイデンティティというよりも、時代に属し、時代とともに変容するアイデンティティのあり方を示唆している。ジェイムズ作品は、起源を欠いたまま、語りの連鎖を生み出すことによって、その文学的地位を確立してきたといえる。しかし作者は、語りの中の様々な幽霊をとりまとめる神の位置にいるわけではなく、それらの幽霊のひとつになることによって、その権威を維持している。過去と現在が共存する語りの中で、作者はその変容する幽霊的なアイデンティティにより、いまも読者との交渉を続けているのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、「アイデンティティ」という語がカバーする広い意味範囲を踏まえつつ、ヘンリー・ジェイムズにおけるアイデンティティ構築とその破綻という問題について多角的に論じたものである。

従来のヘンリー・ジェイムズ研究においては、イギリスに帰化したアメリカ人作家としてのジェイムズにおける文化的アイデンティティの模索という側面に議論が集中しがちであったが、本論文は、文学テクストそのものの同一性の危うさ、「オリジナル」と「コピー」との逆転現象（第１部）、テクストの意味解釈をめぐる作者と読者との交渉、『ニューヨーク版全集』の編纂による作家的権威の確立の試み（第２部）などの問題をそこに絡ませ、近代小説の“Master”としての彼のアイデンティティがいかに構築されたか、またその過程において、それ自身の脱構築の契機がいかに内包されることになったかを論じており、そこに本論文のもっとも大きな特徴が認められる。その議論は作品テクストの綿密な解読に裏付けられており、たとえば、*In the Cage* の女性電信士による「読むこと」と「書くこと」の実践が「現実」を構築していくプロセスを分析した第３章など、注目すべき作品解釈を生み出している。

第３部では、「アメリカ」ないし「アメリカ文学」という集合的・文化的なアイデンティティ構築の問題に関心が移るが、*The Aspern Papers* におけるアメリカ人詩人の「遺稿」探索をめぐる物語とジェイムズの Hawthorne 論との関係を鋭く突いた議論（第６章から第７章）は、文化的なアイデンティティ構築の問題を、文学テクストや作家存在の同一性という前半の関心に巧みに関連させつつ論じていて、本論文でもとくに秀逸な議論と評価できる。

脱構築的なテクスト解読と文化的アイデンティティへの問題関心が、全体としてより有機的に結びつけられたならば、本論文はさらに完成度の高い論文になったといえるかもしれないが、そのことによって本論文の価値が損なわれるわけではない。

以上のように、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分価値あるものと認められる。

【7】

氏　　名	岡　田　章　子（おか だ あき こ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第　２１６１７　号
学位授与年月日	平成 19 年 10 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学 位 論 文 名	Keats and English Romanticism in Japan （日本におけるキーツとイギリス・ロマン派の研究）
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　木村　茂雄 （副査） 教　授　伊勢　芳夫　　准教授　小口　一郎

論 文 内 容 の 要 旨

本書は明治初期にイギリス・ロマン派の詩が日本に紹介されてから、その近代化と共に日本の土壌に根を下ろし、受容された過程を概観するものである。特にキーツを中心に日本の読者にいかに愛好され、研究されているかを考察し、欧米の読者に広く知らせることが狙いである。ロマン派の詩は当初から現在に至るまで広く研究されているにもかかわらず、大部分の文献は日本語で書かれているため、その研究はほとんど海外に知られていない。また国内で我が国の研究を論じたものは幾つかの論文があるのみで単行本はない。日本におけるロマン派研究の実態と具体的な業績を海外に伝えることを目的とする。

日本は200年余にわたる鎖国を解き明治維新を経て近代化を歩み始めた1860年代から国際社会の仲間入りをした。この頃英国はヴィクトリア朝の繁栄期で、その国力のためと英語の普遍性のために、日本は教育・軍事・社会生活全般にわたって英国を模範とした。アメリカ合衆国も基本的に英国と同じ文化圏と考えられ、両国は日本の近代化の目標のひとつとなった。1880 年代になって欧米の民主主義が取り入れられると、人の平等が強く主張され、生まれや地位による差別なく、勤勉が国家と個人の繁栄の基本であると考えられた。この背景のもと、欧米文化が日本の近代化に重要な意味をもった。

この風潮は文学にも影響を及ぼした。日本には 1000 年以上の詩の伝統があるが、英文学が紹介されるや、すぐさま日本文学の中に融合された。1882 年に出された『新体詩抄』はその先駆である。伝統的な和歌や俳句では表現しきれなかった新しい感情が歌われた。14 篇の訳詩と５篇の日本の詩が編纂され、形式の上でも内容の上でも外国文学と日本文学の融合を示すもので、日本詩歌の伝統に新しい空気を吹き込んだ。『新体詩抄』にはロマン派の詩は含まれていないが、後の『文学界』を中心とするロマン派受容の基盤となった。ロマン主義は日本の近代化と平行して受け入れられ進展していった。

本書は２部に分かれ、第１部では戦前・戦後のロマン派受容の軌跡をたどり、ワーズワス・コールリッジ・バイロン・シェリー・キーツの５詩人が時代と共にその受容にどのような変遷があり、欧米の研究が日本の研究にどのような影響を及ぼしたかを代表的な著書を具体的に紹介しながら検討する。５詩人の中で最も人気のあったのはワーズワスとキーツであるが、そのうちキーツに焦点を絞り、その研究の流れを詳細に考察する。さらに範囲をせばめてキーツの詩の翻訳を取り上げ、初期の創作的な訳から最近の原文に忠実な訳に至る変遷を検討する。第２部では視点を日本におけるロマン派及びキーツの受容からひとりの読者からみたキーツへと転じ、彼の詩がいかに心を捉えるかを論じる。

第１部で取り上げるのはロマン派詩人受容の歴史である。まずワーズワスが人気を集めた。その自然詩が日本人の

心に親しみやすかったからで、彼の詩は明治期の多くの詩に模倣され、その詩論は日本の詩論に移入された。ワーズワスの『抒情民謡集』の序文で宣言された新しい詩の時代の到来は島崎藤村の『若菜集』の序で近代詩の夜明けを告げた。1900 年頃までのワーズワスに対する情熱は「ワーズワス熱」と呼ばれたが、それは大正デモクラシーの到来と共により政治的な意味の深いバイロンやシェリーへの情熱に移って行った。特にバイロンへの崇拝は「バイロン熱」と呼ばれたが、あまり洗練されたものではなく、バイロンの文学を深くは理解しない表面的なものであった。しかしバイロンの情熱的な人生や自由の渇望は大正デモクラシーの雰囲気の中で人々の心を引きつけ、彼の伝記が書かれ作品が翻案された。シェリーもまたその自由の概念が賛同され、日本文学の中に引用された。キーツへの愛好は日本の政治的動向には左右されなかったが、時代と共に次第に注目を浴び模倣された。コールリッジは他の詩人のように奔放な人生や物語の魅力や近づきやすい詩が少ないこと等から注目されるのが遅れた。全体にロマン派への愛好はより広くなっていったが、研究レベルではまだ低く欧米の研究の模倣にとどまったが、戦前の研究者は日本文学の造詣が深くその研究の中に日本の詩歌に言及しているのは意義深い。この時期の外人教師の活躍も見逃せない。第二次大戦及びその後 20 年ほどは学究的な研究は少なく戦前の名残の感があったが、5 詩人の受容にも変化が見られた。大正デモクラシー時代のバイロン・シェリーへの熱狂は消えた。T.S. Eliot の低い評価も影響してシェリーの人気は下火となり、バイロンも何故か低迷した。1970 年以降は科学的近代的な研究が花開いた。出版物もふえ、単なる欧米の研究の模倣や単純な翻案の域は脱した。中にはシェリーの手稿を編纂・分析して世界的な評価を受けた業績もある。1975 年のロマン派学会創立は一層研究を進展させ、海外との交流も多くなった。国際学会への参加も容易になり、それをきっかけに日本シェリー研究センターや日本バイロン協会が誕生した。

次にキーツに絞り、始めて彼の名が日本の文献に登場した 1871 年から現代に至るまでの経緯を追う。最初の記載は Samuel Smiles の *Self-Help* が『西国立志篇』の書名で中村正直によって訳された本の中で「其子ハ売薬商ノ子ナリ」として（誤って）紹介されたものである。それ以降しばらくは断片的に英文学史や百科事典などに名前が散見される程度であったが、1890 年代から『文学界』の同人を中心に広く愛好されるようになった。初期の代表的な愛好者は平田禿木、蒲原有明らで前者は『文学界』に 6 ページほどの「薄命記」を書いてキーツが身分の低い生まれながら天才詩人として名声を得たと讃え、これは明治期の立身出世の風潮の中で人々に受け入れられた。このキーツ観は長く日本の読者に定着した。後者は“Bright Star”のソネットの美しい日本語訳を『独弦哀歌』に所収して評価を得た。近代日本詩人の中で最もキーツを崇拝したのは薄田泣菫で新しい詩形式である「賦」や「絶句」を彼から学び、内容も模倣した。研究書では佐藤清著『キーツの芸術』（1924）や斉藤勇著 *Keats' View of Poetry*（1929）が金字塔である。特に斉藤勇はそれまでの感傷的なキーツ像から脱して人道的詩人としてのキーツ像を描き出し、キーツ研究を大きく前進させた。終戦直後の混乱を挟んで、ニュー・クリティシズムの影響を受け、さらに最近のニュー・ヒストリシズムの理論も取り入れて、テーマの捉えかたも多様になったが、まだ欧米の研究を何年か遅れて追随する面もあり、真に日本のキーツ研究が国際的貢献をするには日本読者としての観点からさらに深い研究をすることが必要である。

初期のキーツ詩の受容で大きな役割を果たしたのは翻訳である。キーツに関する最初の単行本は田山花袋訳『キーツの詩』である。当時翻訳は主として文人によって担われたので熱烈な愛好者ではあったが、語学力の不足や詩論の理解不足から拙いものも多く、この本も誤訳の多いのが指摘された。概ね当時の文人の訳は原詩の意味を忠実に伝えるよりは日本の感覚で受け止めてそれを移植するという考え方であった。これと対照的に最近の翻訳は主として研究者によってなされるので研究対象として考えられ、原文の意味を忠実に移そうとするため、多くの注がつけられ明治期の訳のような味わいが失われる場合もあった。1974 年には出口保夫によりキーツの全詩の口語訳が出された。田山花袋の『キーツの詩』出版から約 70 年である。

第 2 部ではこれほど愛好されたキーツの魅力の一端を探る。その第一の関心は医学の教育を受けたキーツである。日本文学の伝統にも医師でありながら詩人であって両分野で優れ、知性を代表すると尊敬された人々がある。その点からもキーツに親しみを覚えるにもかかわらず、何故か日本には医師としてのキーツに関する研究が少ないのは残念である。彼は 6 年間医学を学び、それは詩人としての年数とほぼ同じである。その間彼の直面した厳しい現実が彼の人生観にも広がりをもたせ、その用語やイメージにも反映される。彼が常に追求した「世界に役立つことをしたい」という理想は詩の中に医学と文学の調和をもたらすものである。初期の詩からオードや「ハイペリオンの没落」に至るまで医学の体験に由来すると思われる表現や詩想を分析する。第二に彼の現実的な医療の世界と対照的な魅力が魔法や妖精、神話などの超自然の世界である。特に「レイミア」や「つれなき妖女」の女主人公は魔女であり妖精であ

り、人間と非人間との恋が歌われる。「聖アグネス祭前夜」では登場人物は人間であるがその中世ロマンスの背景はキーツの豊かな想像から生まれた超自然の世界で物語の中に読者を誘う働きをする。日本文学にも超自然現象が人間世界に繰り広げる神話や民話の伝統があるが、キーツの描く鮮やかなレイミアの変身や神秘的なつれなき妖女は簡素な日本の民話や超自然現象とよい対比となり、日本の読者にとってあこがれである。もうひとつキーツの詩で特徴ある魅力をもつのはその凝縮した具体性に富んだ言葉使いである。「聖アグネス祭前夜」の美しさのひとつはそれが描かれる含蓄のある用語によって作り出される。冒頭、厳冬の深夜に祈祷僧を登場させ、続いて視点を城の外から中へと移し、そこで聖アグネス祭の伝説の枠組みの中で恋人達が愛を成就し、妖精の国から吹いてくる風にのって見知らぬ世界へと飛び立って行く。この魔法漂う空想の世界を現実に根を下ろした具体性のある用語で描いて読者を魅了する。これら三点――医師としてのキーツ、超自然の美、優れた言葉使い――はそれぞれ異なった角度から彼の詩の美しさを呈示するものであるが、相互に関連をもちながら彼の詩の世界を繰り広げる。

この本はキーツを中心とするロマン派詩人の 120 年余に及ぶ受容の概観と、キーツの魅力をいかに読み取るかの両面から、日本の研究の現状を欧米の読者に知らせ、それによって日本のロマン派研究が国際的に貢献できるようになることが狙いである。

最後に補遺として私が 1993 年にキーツが医学を学んだガイズ病院（ロンドンに現存する）を訪れた時の個人的な印象記を付している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、近現代の日本におけるイギリス・ロマン主義詩の受容を２部構成で論じたものである。第１部は明治初期から現代までの受容史を詳説し、第２部では日本人読者としての観点からロマン派詩人John Keatsの詩を分析し、受容の具体例を提示している。日本における英学史研究の中でも、ロマン派に焦点をあてた本格的な研究はこれまでに存在せず、本論文は貴重な学術的貢献と言える。

第１部の第１章と第２章は、５人の主要なロマン派詩人 Wordsworth、Coleridge、Shelley、Byron、Keats の明治以降の受容史である。『文學界』にはじまり、鴎外、透谷、漱石などもかかわった初期の受容は伝記、翻案、自由訳、文学論の導入などにより、これらの詩人を日本文学に移入することを中心とした。この受容形態が学術的研究と、原文を尊重した翻訳という現代的な形へと移行していく過程が、多くの一次資料に基づきつつ説得力豊かに実証されている。また、富国強兵や大正デモクラシーなど時代思潮の推移にともない、注目される詩人が移り変わっていく過程の論証も興味深い。

第３章は日本におけるキーツの研究史であり、斎藤勇や日夏耿之介らが確立した日本独自のキーツ研究が、近年の国際的な水準の研究へと発展する過程を論証している。第４章は、キーツ作品の翻訳史を扱う。初期の翻訳は田山花袋らによる自由訳であったが、戦後は正確さに重きを置いた学術的翻訳が主流となり、それは 1974 年の全詩集訳、2003 年の長編詩 *Endymion* の新訳に結実する。最初期から現代にいたる主要な訳業の内容を検討し、その特徴や問題点を指摘している点で、本章は高く評価できる。

第２部にあたる第５章、６章、７章は、キーツの詩の批評的分析である。第５章は文人医学者という日本的伝統を受け、キーツの医学的側面を考察する。彼が受けた医学教育を考察し、作品中の医学用語やイメジャリーを分析したうえで、「人類の医師としての詩人」というキーツの詩論に結びつけている。個々の分析に卓見の見られる、興味深い章である。第６章ではキーツが描く魔法や妖精を日本の伝承物語と比較し、超自然的現象に対する両者の態度の差異を分析する。第７章は物語詩“The Eve of St. Agnes”を論じ、複雑な感情や態度を表出することばの用法を明らかにしている。第２部は先行研究を十分に咀嚼した、独自の学術的貢献として評価できる。

以上のように、本論文は優れた独創性を認めうる研究である。文学理論や領域横断的な研究動向が扱いきれていないこと、また第１部と第２部の有機的連関の説明が充分には尽くされていないといった問題はあるものの、それは着実な資料的裏付けをもって、未踏の分野を開拓した本論文の学術的価値を損なうものではない。よって本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分価値あるものと判断する。